
満月のかたちをした雨の痕は

鳥久保咲人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

満月のかたちをした雨の痕は

【Nコード】

N1601K

【作者名】

鳥久保咲人

【あらすじ】

「わたしには想うだけで器官の狭まるような相手がいる。」
大学四年生の引きこもりがちなアキの一夜の珠玉の読みきり恋愛短編小説。

濃紺の空が降りて来て、わたしはやつと安心する。

混沌とした闇夜。怠惰する夜風。嫉妬する心象。淫乱な身体。渴望する精神。憂鬱なわたし。 満月。

日が暮れて世界が闇に溶け始めると、わたしは白い雲の描かれた水色のカーテンを開ける。シヨルダーバッグを斜めにかけて家の鍵を持ってドアノブを握る。振り返ると本や衣類が散乱する、蛍光灯の切れた部屋があった。山積みされた本の縁や棚に綿埃が溜まっている。

少し前から停滞前線がこの部屋に滑り込んできたまま離れてくれない。停留する空気と滞積する想いで部屋が溢れかえる。

大学四年生、八月。内定をもらっていないのにも関わらず、就職活動はほとんどしていない。就職を諦めてしまったわけではないが、どうしても家から出たくなかった。四年生になって半年、大学へも片手で数える程度しか行っていない。

だが、わたしは世に言う引きこもりではない。そこまで深刻ではない。週に一度は買い物に出かけるし、三日に一回はコインランドリーに行く。ただ、夜しか活動できない。太陽を見るとイライラとしてくる。日差しが自分を突き刺してくるような、否定してくるような、嫌な気分になってくる。就職活動を始めてから、スーツを着るようになってから、こんな穴蔵にすむびくびくとした小動物になってしまった。変えたい。そう思う度に苛立ちが競りあがってくる。部屋に埃が溜まっていく。それを見るたびにまたむしゃくしゃする。

ふいに部屋から目を背けたくくなって、急いで家を出た。ドアを開けると雨が降っていた。胸が騒ぎ出す。熱く火照った身体のまま、

駅に向かった。

わたしには想うだけで器官の狭まるような相手がいる。

それは、ちょうど関東に停滞前線が重なっていた五月下旬、土砂降りの深夜だった。

わたしは傘を持って出ても必ず置き忘れてくる人間だった。わたしのなかの検索ワードに 買いなおした傘の金額 と打ち込めば、必ず 三万以上 と表示されるに違いなかった。だからいつしか諦めに似た感情が生まれてきて、そのために家を出るときに雨が降っていなければ、傘を持っていかなかった。

洪水で地元のT駅が深海の伝説の都市になってしまふのではないかと危惧するような五月下旬の水曜日、わたしは一人、T駅前で雨宿りをしていた。

その日はゼミの一人の誕生日パーティで遅くまで新宿の居酒屋にいた。それなりに楽しかったし、それなりにはしゃいだけれど、居酒屋を出るとあからさまな疲れが来た。煙草を吸うのを我慢していたからだ。普段それほど吸わないものの、人が多い場所に行くと無性に吸いたくなってくる。わたしは笑顔のまま、みんなが酔いつぶれていくのをただじっと眺めていた。途中で抜けるとも言い出せず、結局最後まで居座った。このときまでの自分はこの場所にいることに息苦しさをさほど感じなかったが、ただひたすらに空虚ではあった。

最終電車で最寄り駅を降りたときもまだ雨は強く降っていた。仕方なく駅の屋根のある柱の隅に寄りかかって雨が止むのを待った。こんな日にタクシーの不機嫌なオヤジに気とお金を遣うのは癪だった。

隣に男の人が立っていた。視界に入る範囲でその人を意識する。

顔はうまく見えないが、黒いシャツに黒いネクタイ、黒の綿のパンツに斜めがけのバッグをかけていた。髪はどちらかといえば短髪で、背はわたしより頭ひとつ分くらい大きいから百七十くらいだろう。痩せている、というよりは狭い路地を猫並みに通り抜けられそうな薄さだな、という印象だった。

「雨待ちですか？」

「……」

急にその黒猫男が話しかけてきたので、一瞬で体中が熱くなった。

「……」

わたしは唾を飲み込む。

「やば、きつまずいなあ」

思わず男の顔を見ると視線がぴたっと合った。

「や、独り言です。すみません」

「は……いや、すみません」

黒猫男の視線がこちらに向いた。これといった特徴はないが、白い肌とシンプルで素朴な顔だった。

「いや、こちらこそ……」

「いえ……」

わたしたちはぺこぺここと頭を下げた。黒猫男がくすりと笑いながら話を切り出す。

「どんぴしゃですね」

「雨ですか？」

「ええ」

「すごいですよね」

「駅から家は近いんですか？」

わたしは一呼吸おいてから呟いた。

「えっと、遠いです」

「そっか、俺も」

「……そ、そうですか」

急に発せられた「俺」という言葉にどきっとした。

「俺の最寄り駅はここから三つほど北上した小さな駅」

笑うと犬みたいだなと思った。それが完璧にわたしの欠けた部分にはまった。

「それって……」

「そ、C 駅行きを終電を乗り逃したってわけです」

「ど、どうやって帰るんですか?」

「タクシー使つて帰るまでの家じゃないし、漫喫でも居座りますよ。ちよつと明日は休みだし」

「お仕事ですか?」

「うん、サービスマンだけだよね」

「お、お疲れ様です」

「そっちは? 飲みの帰り?」

こちらに視線が来るたびに体が熱くなってくる。

「まあそんな感じですよ」

顔が真っ赤だっただろうか、と手の甲で頬を触った。熱い。

「じゃあお腹いっぱいだよ」

首を傾げる。動作のひとつひとつに身体が異常なほど反応する。

「あ、いや、ポテトしか食べてないんで」

「君、あれ? 大人数とか苦手なタイプ?」

「よくそう言われるタイプです」

「食べてく?」

「え?」

「よければ一緒に飯、食べませんか? いや……もし良かったら時間つぶしに付き合ってくれませんか? 雨宿りと称して」

そのとき、わたしは不思議と警戒心はなかった。直感かもしれないし、家に帰れない同情心からかもしれないが、今思えばもつと話がしてみたいという好奇心が先行していたようにも思う。

「大丈夫、無理しなくていいよ。女の子ならいろいろ不安だろうし」

「あ、いえ、そんな。……ぜひ」

目は見られなかった。

それからお酒じゃなくてファミレスなんてどう？ と近くのチェー
ン店のファミレスに入った。向かい合ってボックス席に座る。

「改めて、春瀬昇一です。シユウって呼んでください」

「え、どうしてですか？」

「臭うからシユウ。中学からずっとそう言われてんの」

「え？」

「におうって言うっても飼ってる犬のおいだったんだだけどね」

「そっちですか？」

思わず笑ってしまう。

「どっちだと思った？ 終了のシユウって？」

「まさかそんな」

「ふふ、まあ好きなように呼んでいいですよ。そちらは？ あ、偽
名でもいいんで」

「アキ」

「俺のシユウにかけて？」

一瞬、何のことか分からなかった。

「どういうことですか？」

「漢字にしたら音と訓でしょ？ 上手いなと思って
わたしは視線を落とした。

「あ、そうですね。でも、本名です」

「いや、ごめん」

「あ、いえ、大丈夫です」

胸の前で勢いよく両手を振った。大げさな反応になった自分が恥
ずかしくなる。

「アキさんはいくつなんですか？」

「大学四年です」

「ほう、俺は社会人……六年目になるかな」

「じゃあ二十八？」

「そんなふけて見える？ 大学行ってないから今年で二十四。介護
福祉士なんてやっています」

シユウさんは頬杖をついて笑う。

「あ、すみません」

「ふふ、脅えすぎだよ。大丈夫、取って食ったりしません」

「えっ」

「嘘です、ごめんなさい」

話は尽きなかった。雨は夜の三時を過ぎてようやく小降りになってきたが、初めてなのにも関わらず、わたしたちの会話は止まらなかった。シユウさんが気を遣ってくれたのかもしれないが、はずむほどでもなく、落ち着いたトーンで時間だけが台風のように過ぎていく。彼女はいるのか、という肝心な話はどうしても最後まで聞けなかった。

ようやく出ようかと言った時は朝の四時だった。シユウさんは店を出て背伸びをする。

「女の子なのに遅くまでつき合わせてごめん」

「いえ、タクシー代が浮きましたし。それにご飯代まで出してもらっちゃって……すみません」

「こちらら社会人よ？ 学生が気遣うなって。損するよ」

「よく言われます。昔から甘えられない損な性格なんです」

「分かりやすいタイプだもんね、アキさんは。あ、雨完全に止んでる。月まで見えるわ」

見上げると、満月一步手前の月が次第に明るくなってくる空の西で、朝になったことを忘れてるようにうつすらと水色の空に取り残されている。

「消しごむで消えそうな月ですね」

「水のついた筆ではらっても消えそうだ」

しばらくわたしたちはひと気のない歩道で立ち止まって上を見上げていた。時間が止まればいいのに、と思っっている自分がいた。この人に帰る場所がなければいいのに。

「こりゃ明日はきつと綺麗な満月だわ」

声を聞いてはっとした。思わず背を向けて答えた。

「あ、明日も同じように、見えますかね？」

「そりゃあ見えますとも。どこにいても空は空、満月は満月、俺は俺で、アキさんはアキさんだ」

「そ、……そうですよね」

わたしは明日、シュウさんと同じ満月が見れるんだと思うと、別れが少し寂しくなくなった。そんな自分を確認して、温かい気持ちになる。

それから何事もなかったかのように別れた。連絡先も聞かず、その後の約束もせず、本当に何事もなかったかのように別れた。

出会ったのは土砂降りの雨だったのに、帰りは月も消えかけた夜明けだったのに、満月を見るとあの日を思い出す。わたしの完璧な窪みにはまる完璧な満月。闇夜に彷徨うわたしに光を与える完璧な満月。

当日は、こんなこともあるのだな、というふわふわした感覚だったが、月日が過ぎていくにつれ、その日が絶えずわたしにささやいてきた。道路脇の雑草の間から、路地裏の隙間から、夜の闇の切れ目からささやいてくる。

わたしはその日、一度しか会っていない相手に恋をした。たぶん恋だと思う。日常生活の隙間にするりと予兆もなく滑り込んで来て、散々かき回してから出たり入ったりする。どんな人間で、何が好きで、どんな人生を送ってきたのかも知らない、恋人がいるかさえも判らないのに。

T駅に来ると否応なく彼のことが頭に浮かぶ。駅に来る度に、駅に来てあの土砂降り进行を描くだけで、シュウさんの幻影が見えてく

る。毎日のように見える。感じる。あのとき使った傘を見るだけで
淫らな感情が夜毎襲ってくる。会いたい。話がしたい。触れたい。
触れられたい。交わりたい。今はその欲望だけで生きている。他の
ことには無気力になる。他のことはどうでもよくなる。こうして抜
け殻のように生きているのもいつか会うシユウさんのため、かもし
れない。

ほんとうに、どうしようもないな。

駅ビルで今日の分の食料を買い込み、店を出ると雨は止んでいた。
夜空を見上げる。夜空なら見上げられる。今日は満月だ。月自体が
光っているような魅惑的な光。月なら眩しくない。わたしを批判し
たりしない。

両手にビニールを持って、わたしはしばらく立ち止まって空を見
上げた。満月の上を薄い雲が流れていく。

『竹取物語』を思い浮かべた。月から使者が下りてくるには絶好
の夜だな、と感心した。

あの人も、今日もこの満月を見ているだろうか。こうして少しで
も見上げて、わたしと同じようにあの時と同じ満月だなあなんて思
っているだろうか。そうだといいな、と独り言を呟いた。どうも一
人暮らしをすると独り言が増えて困る。わたしは首が痛くなっとき
たのでやっとなと視線を戻した。ふふ、と笑った。

すると電話が鳴った。現実を連れてくる電子音。

「はい」

「今平気？」

中学校から腐れ縁のたつひだった。

「うん。なに？」

「今、彼氏と仲直りしてきた」

いつの話だっけと記憶を呼び起こす。

「そっか」

「うん、いろいろガチで話し合ってたさ、結局許しちゃったよ。惚れ

た弱みとは思いたくないけどね。一度くらい仕方ないかなってね」

「でも……これからは今までよりいい仲になれるよ」

「ありがとう。そういえばアキにはまだいないの？好きな人」

「……いないよ」

いるよ。

「そっか。恋愛はいいよ。本当に世界変わるよ。人に優しく出来たり、化粧が楽しくなったり。ほんと毎日キラキラするよ」

「うん」

知ってるよ。

「元気ないね？」

「月」

「なに？」

「月、綺麗だね」

わたしは立ち止まって見上げたまま言った。

「そう？こっちは曇って見えないや」

「え？たつひの家、茨城でしょ？そんな遠くないのになんで？」

わたしは電話の手持ちかえる。

「なんでって、当たり前でしょ。今千葉の家？それなら天候は場所によって違うんだから、必ずしも同じようには見えないよ」

「そっか……」

少なくとも同じ日本なら、どこにいてもだいたい同じように見えるものだと思っていた。

なあんだ、違うのか。なあんだ、一緒じゃないのか。

わたしはしばらくそこに立ち尽くした。

「ちよつとアキ、聴こえてる？」

「……」

あの日から、もう三ヶ月近く経ってしまいました。三ヶ月も経つ

てしまったのに、相も変わらず世界は回り続け、そんな世界にいな
がらも、わたしはいつこうに闇から抜け出すことも出来ず、今も夜
を彷徨い続けています。だからこそ、いまだにわたしのなかであの
一日が光り輝いて止みません。

ねえ、シユウさん。ずっとなんて言わないから、一生だなんてわ
がままなことは言わないからせめてあと少しだけは、あなたと会っ
たあの夜を、わたしのこの闇夜のような日々に差し込む、唯一の光
としてもいいですか。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1601k/>

満月のかたちをした雨の痕は

2010年10月8日15時23分発行